

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書  
VIII—6

1981

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII—6

1981

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、はや八年を迎え、ますます工事側と調査側の調整が困難をきわめること再々となっている。

本書はこの困難さのなかでも、特に人材と時間の不足に反して、激増する調査資料を公開すべくまとめたもので、古代近江を考えるうえで新たな知見が数多く明らかにされている。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、先生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和56年3月

滋賀県教育委員会  
文化財保護課  
課長 沢 悠光

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和55年度の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖東地区の調査成果を収載したものである。
2. 調査にあたっては、地元各町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。
3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師近藤滋を担当者とし、小八木遺跡については静岡県文化財保護協会技師松沢修、奈良木遺跡については同図師利兵衛が実施した。
4. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとにしるすとともに、報告の文責は文末に明記した。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本報告書は近藤が編集し、近藤・松沢が分担執筆した。それぞれ文末に文責を明記した。

# 目 次

## 序

## 例 言

### 第1章 愛知郡湖東町小八木遺跡 ..... 1

1	はじめに	1
2	位置と環境	
3	遺構	1
(1)	周溝の調査	2
(2)	盛土の調査	4
(3)	石室の調査	4
4	遺物	5
5	おわりに	5
(1)	石室平面の規格について	5
(2)	石室内遺物の配置について	8

### 第2章 神崎郡五個荘町奈良木遺跡 ..... 9

1	はじめに	9
2	位置と環境	9
3	遺構	9
4	遺物	12
5	おわりに	12

## 挿図目次

第1章 小八木遺跡	第2章 奈良木遺跡
第1図 位置図	第1図 位置図
第2図 隣接する古墳	第2図 トレンチ配置図
第3図 調査風景	第3図 遺物実測図
第4図 小八木塚本古墳石室実測図	第4図 遺物実測図
第5図 小八木原本古墳出土遺物実測図	第5図 遺物実測図
第6図 石室内出土窯実測図	第6図 遺物実測図
第7図 石室内遺物実測図	第7図 遺物実測図
第8図 石室平面地割推定図	

## 図版目次

### 第1章 小八木遺跡

- 図版1 1 古墳全景  
2 石室を羨道から見る  
図版2 1 羨道部分  
2 石室全景を奥壁から見る  
図版3 1 後室の石敷  
2 後室西壁を見る  
図版4 1 袖石を見より見る  
2 後室東壁部を見る  
図版5 1 閉塞石を内部より見る  
2 同 羨門部から見る  
図版6 1 玄門部しきり石を見る  
2 遺物出土状況  
図版7 1 袖部の須恵器出土状況  
2 奥壁に立てかけられた大刀  
図版8 1 後室の石敷を取り除いた状態  
2 後室北西隅部の須恵器据えつけ状態

### 図版9 1 側壁石の据えつけ状態

2 奥壁の後部

### 図版10 1 古墳東側周溝

2 同 土層を見る

### 図版11 1 古墳西側周溝

2 同 土層を見る

### 図版12 1 鉄製大刀 9 鉄製唐2~8,10~12須恵器

### 第2章 奈良木遺跡

#### 図版13 1 第1トレンチ全景(南から)

2 第1トレンチ基本層序

#### 図版14 1 第2トレンチ全景(北から)

2 第2トレンチ基本層序

#### 図版15 1 第2トレンチ深掘り土層

2 第3トレンチ旧河道廻土層

#### 図版16 1 須恵器壺蓋・壺片等

2 須恵器壺・土師器甕片等

#### 図版17 1 土師器・常滑・羽釜片

2 須恵器長頸壺・平瓶片等

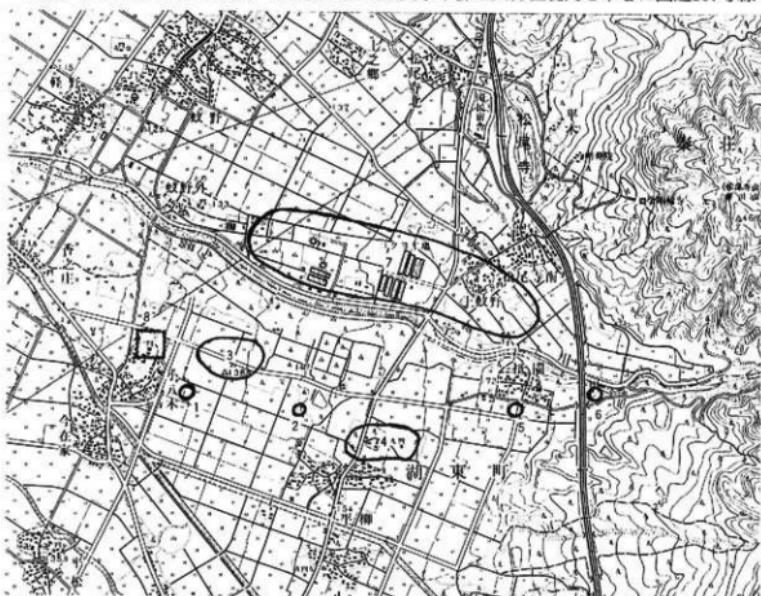
## 1. はじめに

愛知郡湖東町小八木本地先に所在する当墳は小八木古墳群中の1基で、周辺部のほ場整備に際し、当初墳丘上に地蔵堂があったことから除外地の予定であったが、結果として現況保存が困難となり発掘調査を実施することとなった。

調査前の境丘は高さ2m程度の遺存状況にあり、以前は県道に面していたことから、道路に面していた部分、つまり現墳丘の北および西側についてはコンクリート擁壁で限られていて、全体としては主体部等の遺存度については可成り破壊されているものと思われた。

## 2. 位置と環境

当古墳群は小八木集落の南東端にあって、現況では3基の円墳により構成される支群的な小規模古墳群である。付近には当墳の東約0.4kmには残存高が1.5m、全長25mの前方後円墳、小八木東古墳があり、その東0.6kmには大字平柳の天神社境内を中心に国道307号線



- 1. 小八木古墳群
- 2. 小八木東古墳
- 3. 木戸口遺跡
- 4. 平柳古墳群
- 5. 柊園古墳群
- 6. 八幡社東古墳
- 7. 金剛寺古墳群
- 8. 小八木廐寺跡

第1図 位 置 図

の西側にまで広がる、計17基の円墳からなる平柳古墳群が所在し、さらに東0.4kmの名神高速道路を挟んで西に祇園古墳群、東に堅穴系横穴式石室で著名な八幡社古墳群を持つ宇曾川左岸流域の古墳群を形成している。また右岸には上牧野古墳群、牧野古墳群の計298基からなる金剛寺野古墳群と対峙している。一方小八木古墳群の西側下流域については、現況ではまったく実態が不明であるが、かって県道工事に際して形象埴輪を出土した狐塚古墳があり、さらに下流には近年まで愛知郡中唯一とされた後期前方後円墳の長塚古墳が所在している。また古墳以外では小八木集落の春日神社境内から、その北にかけて所在する奈良時代の小八木庵寺があり、集落の東には、やはり奈良時代から平安時代墳と思われる集落跡、木戸口遺跡が所在している程度で、今だ古代の歴史的環境の比較的不明確な地域となっている。

(近藤)



第2図 暫接する古墳



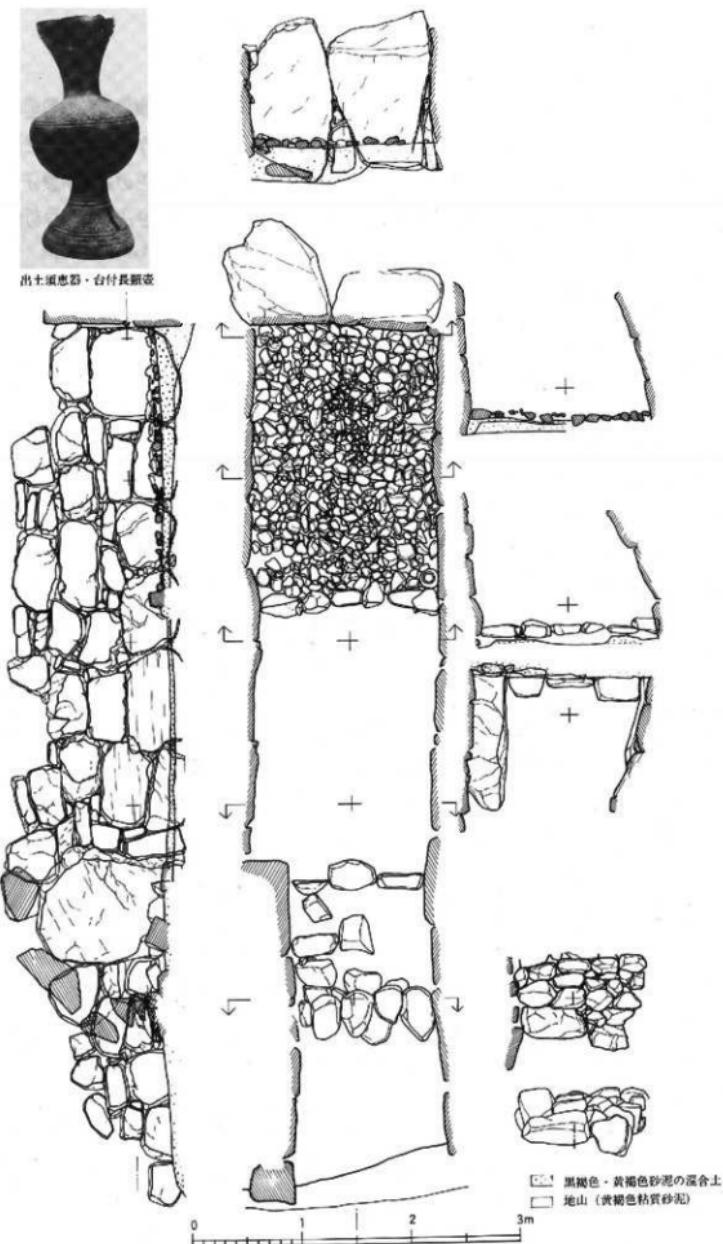
第3図 調査風景

### 3. 遺構

今調査は遺構が古墳と言うことで主体部、および遺存状況の確認と、古墳の規模、形態の確認を第一義として実施した。それは主体部内の調査、墳丘の調査であり、また周溝についての知見を得ることであるため、主体部と墳丘、周溝についてのトレーンチ設定であり、同溝部のトレーンチは西、南、東、北東部の4ヶ月について発掘調査を実施した。

#### (1) 周溝の調査

周溝は南側が現在の道路下で、また北側は従前のほ場整備以前の道路でそれぞれ破壊、もしくは埋められて調査が不能であったが、東、西側でトレーンチ掘りによりそれぞれ周溝を確認した。その結果、東側周溝は幅2m、深さ0.8mで、内部埋土は灰褐色砂泥を主体と



第4図 小八木塚古墳石室実測図

したものであった。また、西側周溝は幅2m、深さ0.3mで内部埋土は黒褐色砂泥を主としたものであった。その周溝の埋土や形状が異なるのは東から西へ傾斜する自然地形によるものと思われる。また、古墳の前面には周溝がめぐっておらず、外界との通路が設けられていた可能性が強い。これら東西の周溝間が25mを測り、弧を描くことから径25mの円墳と推定した。

### (2) 盛り土の調査

古墳は黄褐色砂泥と黒褐色砂泥を交互に、あるいは、その混合土を搗き固めたもので外形を形成している。また、石室は基礎石の据えつけに地山を若干掘り下げて副え石や土による根固めを行い、その後、石を積み上げて裏込め等を行い構築している。

### (3) 石室の調査

石室はその天井石が殆んど取り除かれていた以外は略々完全に遺存しており、閉塞石も遺存していた。石室は南に開口し、平面形は西側に袖のある片袖式の横穴式石室で玄室は幅160cm、長さ512cmを測り、その東側のラインに合わせて幅128cm、長さ288cmの入り口部のやゝ開く羨道が付されている。玄室内はその中央部で河原石の列により二つに分割されている。その後部奥壁寄りは一辺10~15cm程の河原石が一面にびっしり敷きつめられ、その前部が土間であるとの好対称をなす。以下、その敷石部を後室、土間部を前室として記述する。後室の敷石は中央部にやゝ細かい疊が敷かれ、その周囲はやゝ大型の河原石が敷かれていた。また、この敷石の直上には小枝等を焼いた灰が一面にびっしり10~15mmの厚さで堆積していた。この灰、木炭は敷かれたことは明らかであるが、いつ敷かれたのかについて明確ではないが、後述する出土遺物に火痕が無い点から当時のものと考えられる。湿気抜き、あるいは何らかのマジカルな意味を有するのかは明確ではない。この後からは東北隅に壁に立て掛けられた鉄製直刀、金環、鉄製直刀刃片、鉄製刀子、鉄鎌、鉄釘、あるいは南東隅に短頸壺、北西隅敷石下に蓋杯の須恵器が出土している。次に前室は先述した如く土間であるが、そこからはその袖部から須恵器類（蓋杯3セット、無高台壺、甌、横瓶、台付長頸壺、甌、小型直口壺）が、また、中央しきり石付近から鉄製馬具、羨道とのしきり石付近から鉄製馬具の一部がそれぞれ出土した。その出土状態からみて前室の鉄製品と後室の鉄釘、金環が若干移動している可能性がある他は略々原位置にあるものとみられる。

石室内の各壁は大型の河原石（若干の加工があるものもある自然石）を使用し構築され最も残っていた部分で高さ約140cm程度を計測した。このうち東側側壁はその上部にかけて西側にかなりせり出していたが、これは天井石の除去などの後世の手にかかるものとみられる。

西側側壁が略々垂直で上部はやゝ西側に後退しているのも同様の事情によるとすれば側壁上部はやゝ内に向けてせり出していたと考えられよう。奥壁、袖石は共に巨大な石材を利用して略々垂直に立てられており、袖石は方形にするための加工が行なわれている。また、この袖石に対面する東側にも巨石が立てて使われ、併わせて玄門としての意識がみられる。奥壁、側壁の根石はとともに地山を掘り下げ、必要に応じて根固め石を使い、ぐるりと土で固定していた。天井石は羨道部に一石遺存していたがそれは長辺2.3m程の巨大な割り石であった。また閉塞石も遺存しており、それは大型の河原石を用い、玄室側に面をつくって積まれていた。

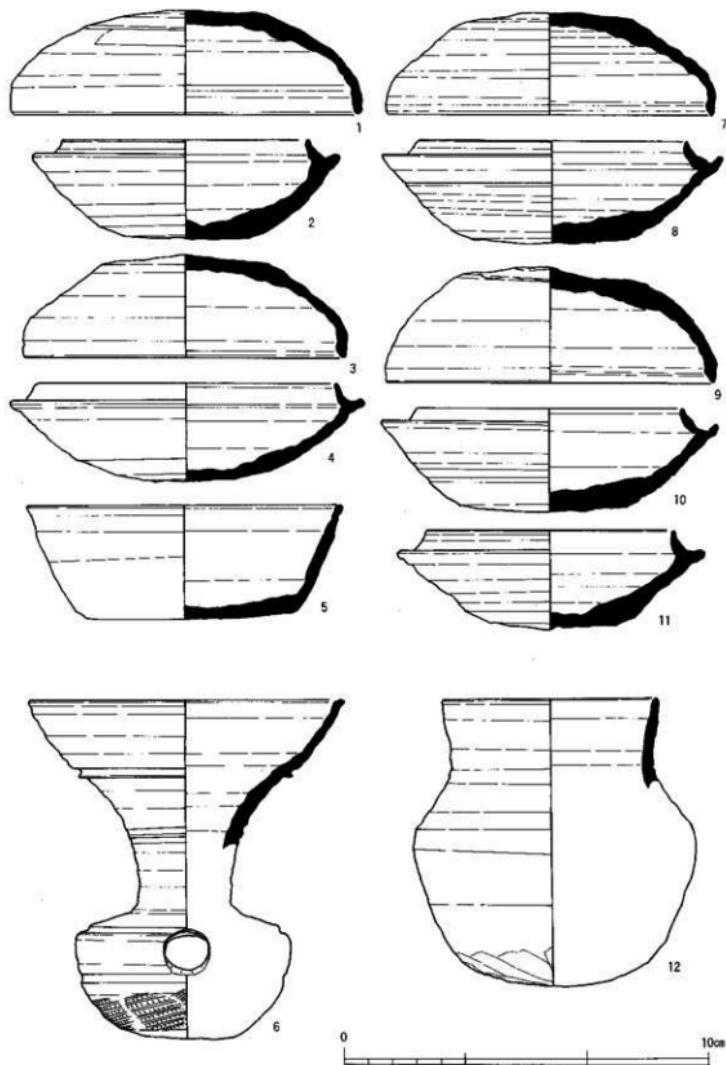
#### 4. 遺 物

出土した遺物は先述の通りで、以下、そのうち須恵器蓋坏について概述しよう。蓋坏は石室内で4セット出土しており、その作手に2種がある。1種は蓋天井部、坏底部にヘラケズリが施されゆるい弧を持つもので薄く扁平な形態で1セット出土し、1種は同部分がヘラオコシのあと未調整で平坦に近く、やゝ深い形態で、坏径10cm前後のもの2セット出土し、また同11cm前後のもの1セットが後室北西隅の敷石下から出土している。また、前室では上記の例から10cm程浮いた状態で無高台の坏が1例出土している。これは蓋坏が逆転した後のもので、深く、腰に稜をつくる形態である。以上の例では天井部にヘラケズリのあるものがやゝ古い様相を持つが、その他の例と大きな時期差はなく、他の須恵器類もこの時期のものである。また、無高台坏は一世代程の差があり、追葬などの行為が考えられよう。

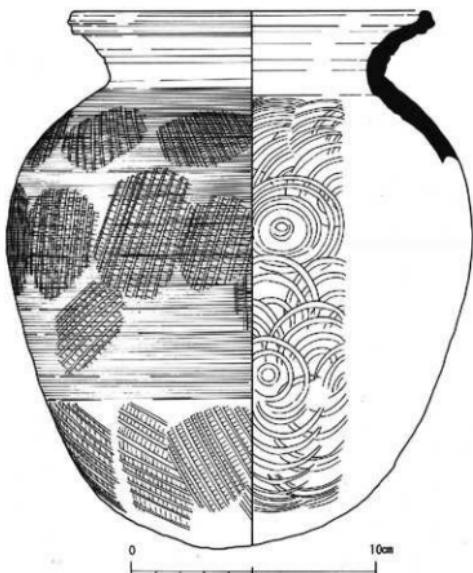
#### 5. おわりに

##### (1)、石室平面の規格について

石室の平面形は先述した如く片袖式で、羨道入り口がやゝ開く形態のものである。羨道から玄室にかけては地の高低のによる差はなく、袖石と二列のしきり石によって内部分割が行なわれている。このうち南側のしきり石は袖石とのセットで羨道と玄室とを分割するものであり、玄室内の石列は後室、敷き石を設ける部分と前室、土間の部分に分割している。このうち後室は木棺用とみられる鉄釘や装身用の金環、大刀などの出土やその位置から棺座としての性格が考えられ、前室はその前庭として位置づけられよう。さらに付言すれば、この後室はその敷き石の大小や敷き方に差がある。即ち、その中心部にはやゝ小型の礫が密に敷かれており、それに対してその周縁はやゝ大型の礫が粗に敷かれるという具



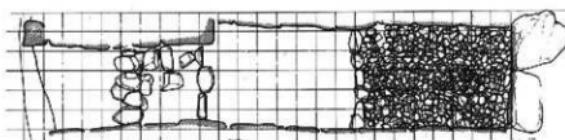
第5図 小八木塚古墳出土遺物実測図



第6図 石室内出土變実淵圖



第7図 石室内遺物分布図



第8図 石室平面地割推定図 (1方眼±32cm)

合である。こうした点と鉄釘が中央小礫部の周縁から出土し、また、他の遺物が中央部に置かれず周辺部に配置されている点から、恐らく、この相異は被葬者の木棺安置部=中央小礫部とその周縁という関係になろう。

さて、以上のしきり石列や石室幅などから各部位の割りつけを考えると32cmという数値が1単位として割り出せる。これを単位として割り付け図化したのが石室平面地割推定図であり、その基礎とした部位は奥壁ライン、玄室中央部しきり石列の幅、同列、羨道部しきり石列、袖石である。この図を要約して平面規模をみると玄室は長さ16単位(512cm)、幅5単位(160cm)、羨道部は幅を1単位減じ4単位(128cm)、長さは調査時は9単位(288cm)という数値が得られる。また、閉塞石もその積み上げ面の描った部分(玄室側)がこの方眼にのっていることが判る。あるいはこの閉塞石も石室築造当初のプランといえようか。また、この図からみれば袖石部がやゝ西側に寄っている。あるいはこれは石室築造のさいに巨大な石材の故に袖石の据えつけが当初プラン通りにゆかず、それと共に周辺の石材の据えつけが混乱してしまったのではないかと推測される。以上から玄室内はきっちり2分割されており、さらにその寸法比は幅の3.2倍が長さということになる。

## (2)、石室内遺物の配置について

遺物の出土位置は石室内遺物分布図に示した通りである。このうち原位置(副葬された時点の位置)から大きく移動したとみられるのは羨道しきり石付近の馬具の一部であり、他の遺物は少しの移動とみられ、この分布が当初の遺物副葬状況を示していよう。従って、その配置は基本的に棺周辺には身体装飾的な品々が、その前庭には祭器的、明器的な品々が置かれるということであろう。また、北西隅敷石下に置かれた蓋壺は棺とは視覚的にも外れるものであり、古墳築造の祭祀に関わるものかとも見える。それと対の位置に設置された短頸壺は敷石と同時期に付設されており、やはり他の須恵器とは別の意味があろう。こうした須恵器から当古墳は6世紀末葉を軸とした時期に築造、埋葬され、7世紀中葉に再び手が加わったことが判明する。

以上簡単に調査結果について記述したが、本調査で石室の規模などについて多くの知見を得た。石室は宇曾川右岸の上蚊野古墳群の階段状石室でないことが指摘出来、その基準尺度として32cmという数値を得たが、こうした諸点が妥当なものか、付近の古墳との比較など今後さらに考察することが必要なことを付言してこの稿を終えよう。

(松沢)

## 第2章 奈良木遺跡

### 1、はじめに

神崎郡五個荘町川並町地先に所在する当遺跡の調査は、五個荘西部土地改良事業に先立ち実施したもので、当町内での初のほ場整備関連調査であった。このため調査についての協力を得んがため事前の地元説明会を実施したが、対象地が湿地帯であることから、遺跡地としての理解が得がたかったが、作業については結果として多大の御理解と協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

### 2、位置と環境

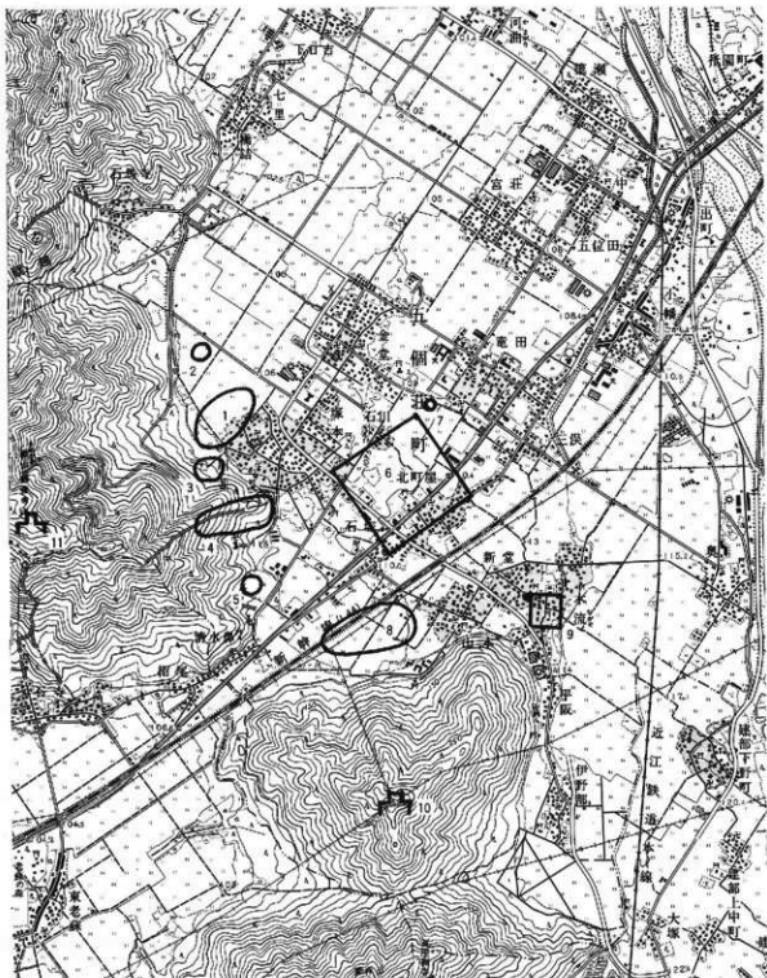
五個荘町川並集落は町域のほぼ西端にあって、西国札所観音正寺への北側登山口となつており、また五個荘商人の出自地の中心的集落の1つでもある。

今回の調査地は昭和49年に立命館大学考古学研究会の手で付近の分布調査が実施された際に、新たな散布地として確認されたところで、現川並集落の西端に位置している。特に当地は、その南に控える観音寺山の裾で、かつ地続きの観音寺一帯の小字が「シル谷」の地名であることからも判断できるように湧水地の様相を呈している。しかし現川並集落は登山道が通る尾根の続きの微高地上にあり、この微高地の西側への広がりが、今回の散布地の性格を示すものと想像された。

付近には現川並集落の東に、東海道新幹線工事の際、土取り場となり、陶棺を出土した横穴式石室を主体部とする円山古墳を中心に、集落の南から南西にかけて後期古墳群の集中する地域であり、また西側の田中にも狐塚古墳群が所在している。さらに川並集落に続く大字清水鼻は観音寺山と箕作山の接点に位置し、蒲生郡と神崎郡の郡界にあり、現在でも新幹線、国道8号線、旧中仙道の通過点であって古代東山道の清水駅家の指定地である。また、大字北町屋、南町屋付近は、大郡神社を中心とした神崎郡衙推定地もあり、一帯は古代神崎郡の中心地と考えられた。

### 3、遺構

今回の調査はほ場整備計画を検討した結果、最南端の山裾の微高地が対象外であったことから面的な削平がないため、計画水路敷の部分についての延長約300mに対して調査を実施した。



- |          |            |           |           |
|----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 奈良木遺跡 | 2. 狐塚古墳群   | 3. 川並古墳群  | 4. 結神社古墳群 |
| 5. 円山古墳  | 6. 堆定神崎郡衙跡 | 7. 海老塚古墳  | 8. 山本遺跡   |
| 9. 木流庵寺  | 10. 箕作山城跡  | 11. 観音寺城跡 |           |

第1図 位置図



第2図 トレンチ配図

調査の結果は各トレンチとも同様の層序で、第1層は平均15cm厚の耕土、第2層は、砂粒を多く含み、旧耕土とも考えられる平均15cm厚の灰褐色粘質土、そして暗灰褐色粘質土を挟んで、現地表下60cm以下は青灰色粘土層（地山）の基本土層となっている。ただもつとも山寄りに設けた第3トレンチの南、つまり山寄り部分では、激しい湧水のため最深部までの確認はできなかったが、厚さ約50cmの茶色腐蝕土、その下層の砂層等が流入、堆積した、幅40m以上の河道痕が検出された。また、第1トレンチでは第3層以下に若干の乱れがあり、青灰色粘土地山層との間に砂層等の間層が見られた。このことは出土遺物自体が第3層に集中し、かつ陶磁器が含まれていたことからも、幾度かの攪乱をへて、幾度かの整地、開墾がなされたと言える。

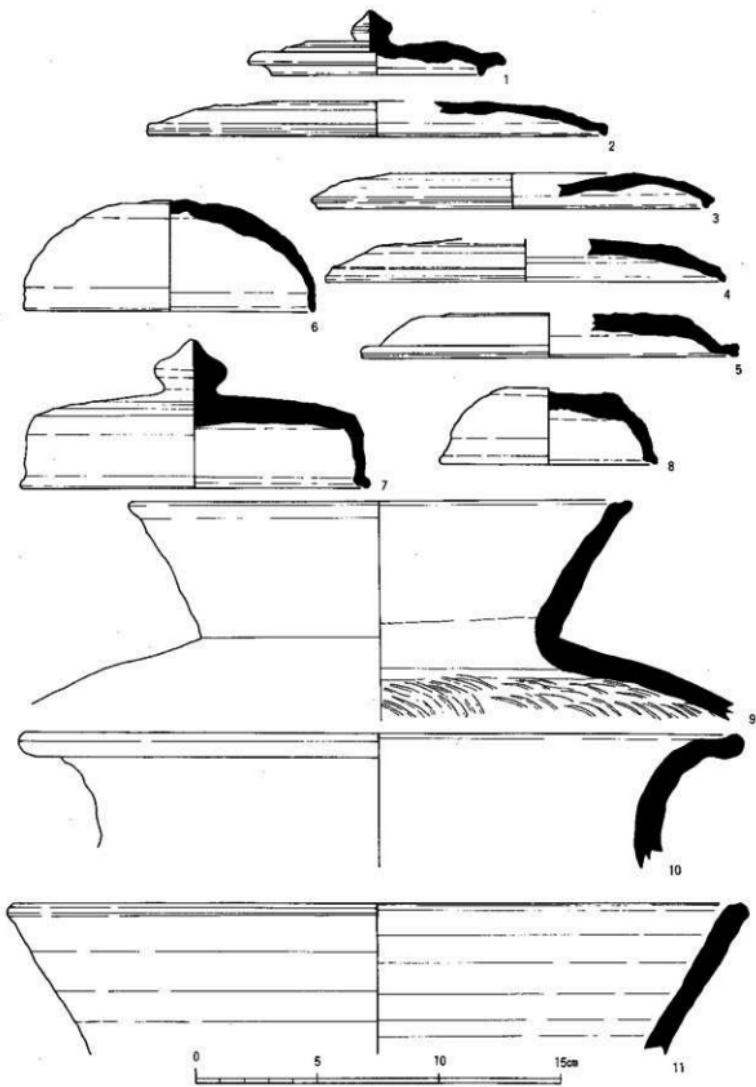
今回の調査では、この第3層以下の乱れと第3トレンチでの河道痕以外、包含層のみで具体的な構造はまったく検出できなかった。

#### 4、遺物

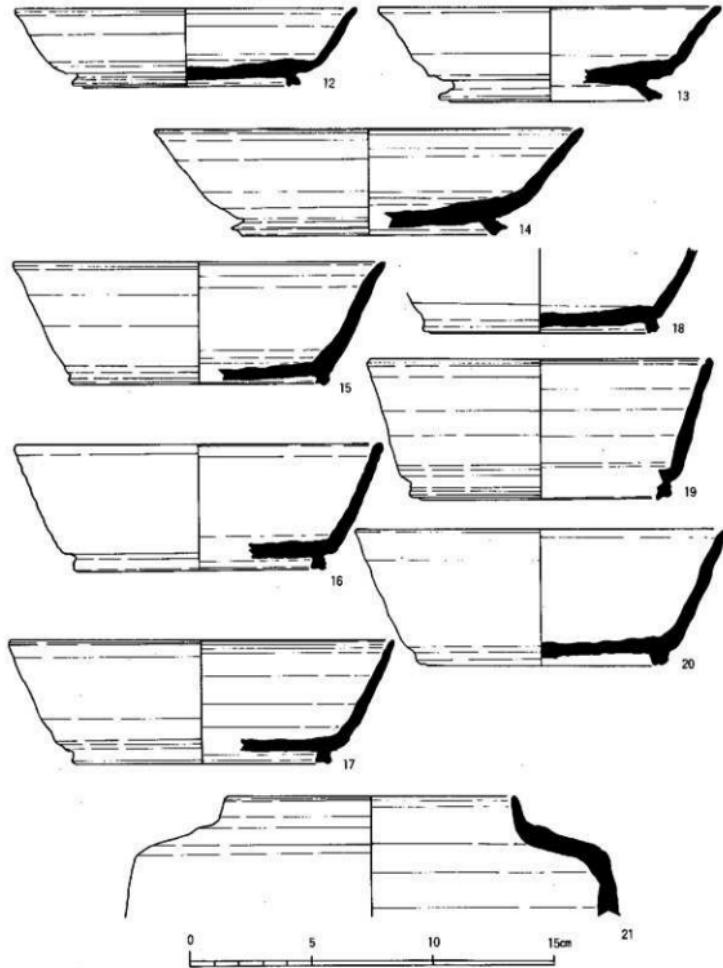
今回出土の遺物は基本層序の第3層と、他は第3トレンチの河道痕埋土の上層部より出土したものが大部分で、遺構とのかかわりはなく、いづれも包含層出土遺物である。ただこの出土遺物であるが、比較的まとまりがあると言えばまとまりの有るようでもあり、反面、時代的には幅があり、まとまりのないようにも思える。つまり時代的には古墳時代末、6世紀末の須恵器、土師器から、江戸時代・17世紀の信楽擂鉢まで幅があるが、白鳳時代から中世までは連綿と続き、なかでも7世紀末から10世紀前半にかけての集中度があると言える。合せて、この集中期の遺物群は、より一般集落の出土品とは若干異なるように思える。また一部「林」等の墨書き土器も認められるが、他の墨書きについては墨痕のみで判読しきれなかった。

#### 5、おわりに

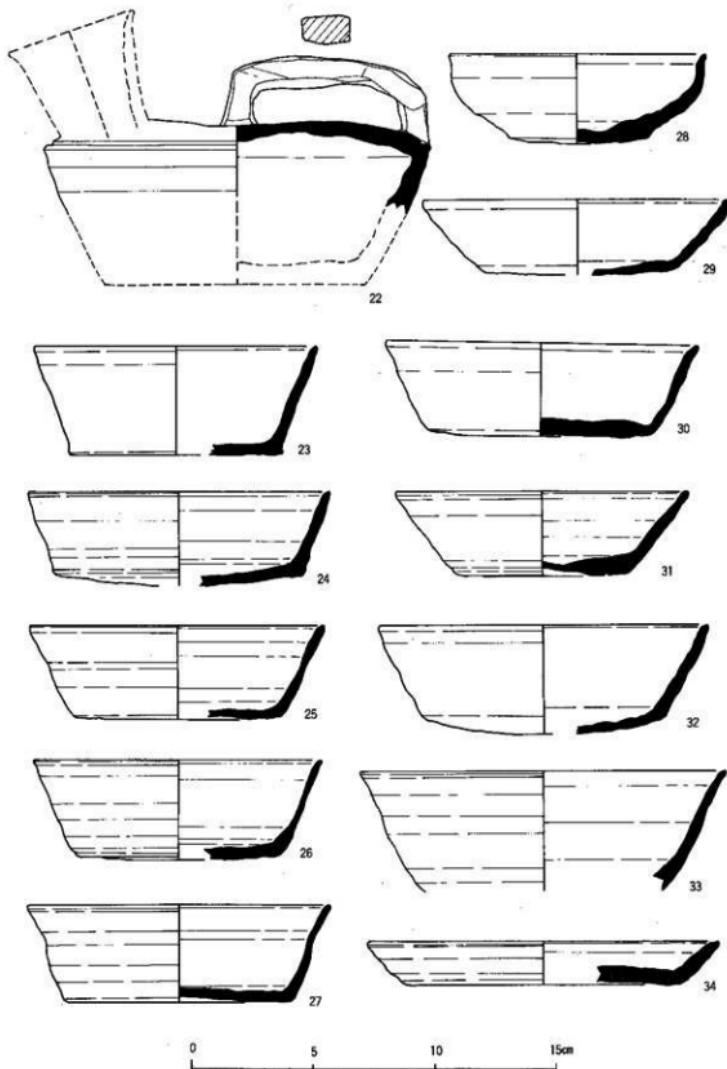
先にも触れたように、今調査では具体的な遺構を確認できなかったが、しかし出土遺物の多さ、磨滅の少なさから、これらを使用した人々の集落は現川並集落に重複するか、あるいは調査地の南にあって、一段高くなつた観音寺山の裾部と考えられる。ただ観音寺山裾部は、そのまま「シル谷」に続くことから、結果としては川並集落に重複すると判断できる。そして、この川並集落周辺の歴史的環境はと言うと、ほぼ地続きの東側に神崎郡衙推定地や清水駅家推定地に接することから、やや飛躍気味ではあるが、これら古代律令制下の地方官衙を形成、またはとりまく集落の一端を遺物からだけではあるが想像できるようであり、今後の周辺部の調査の進行を期待して報告にかえたい。



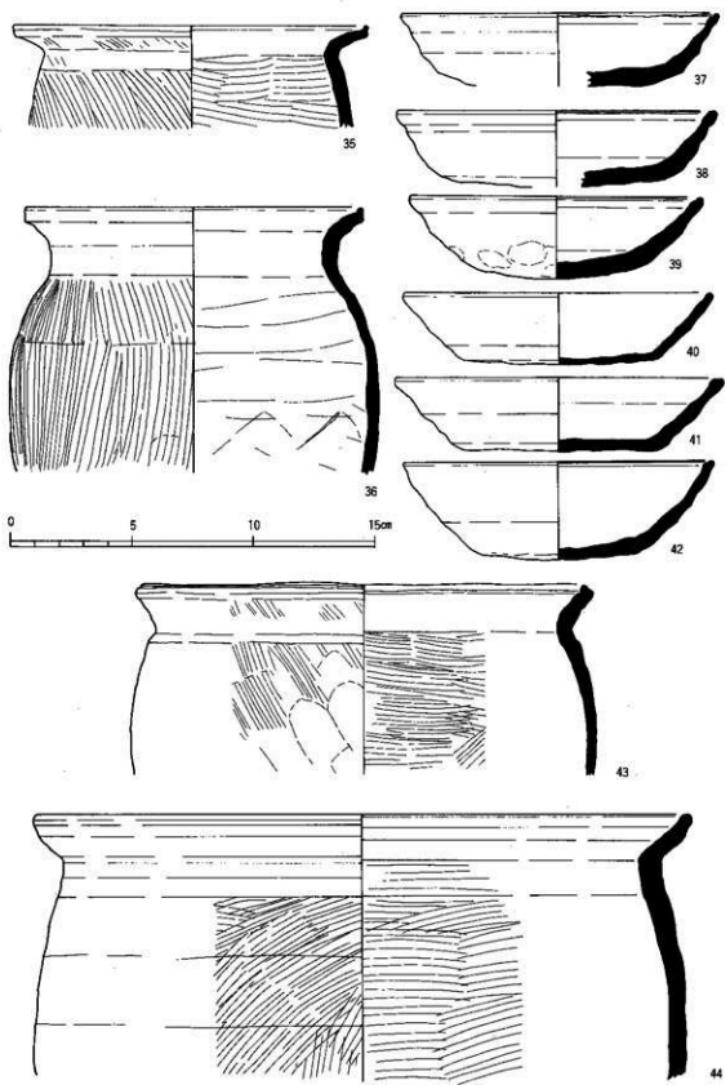
第3図 遺物実測図



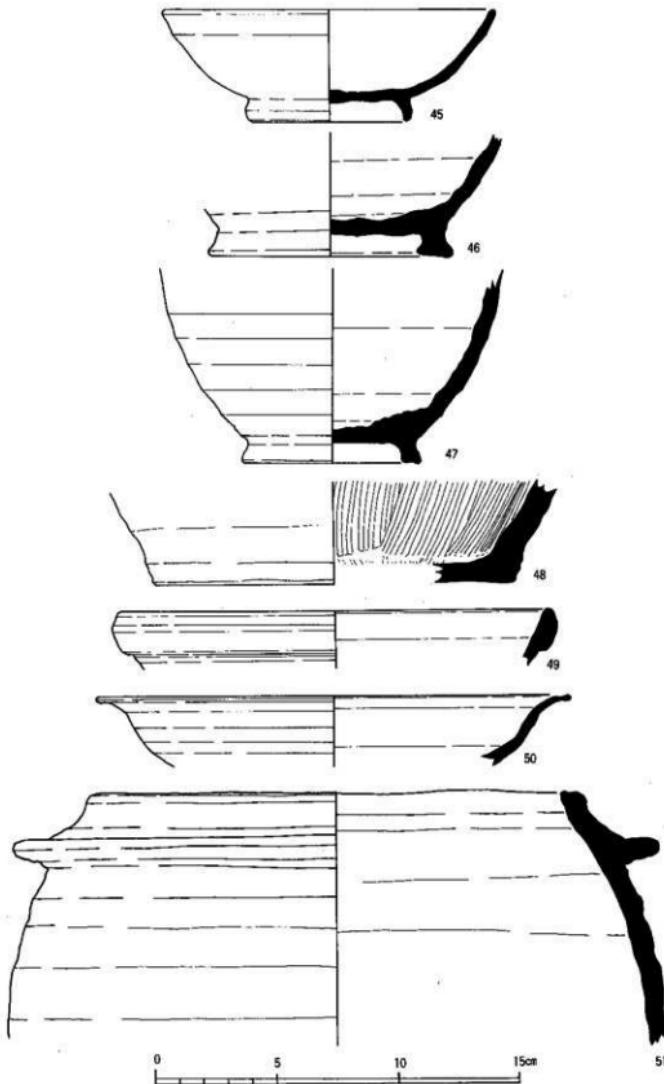
第4図 遺物実測図



第5図 遺物実測図



第6図 遺物実測図



第7図 遺物実測図

図

版



1 古墳全景



2 石室を狭道から見る

図版二 小八木古墳



1 羨門部分



2 石室全景を奥壁から見る



1 後室の石數



2 後室西壁を見る



1 抽石を奥より見る



2 後室の東壁部を見る



1 閉塞石を内部より見る



2 同 滢門部から見る



1 玄門部しきり石を見る



2 遺物出土状況（東から）



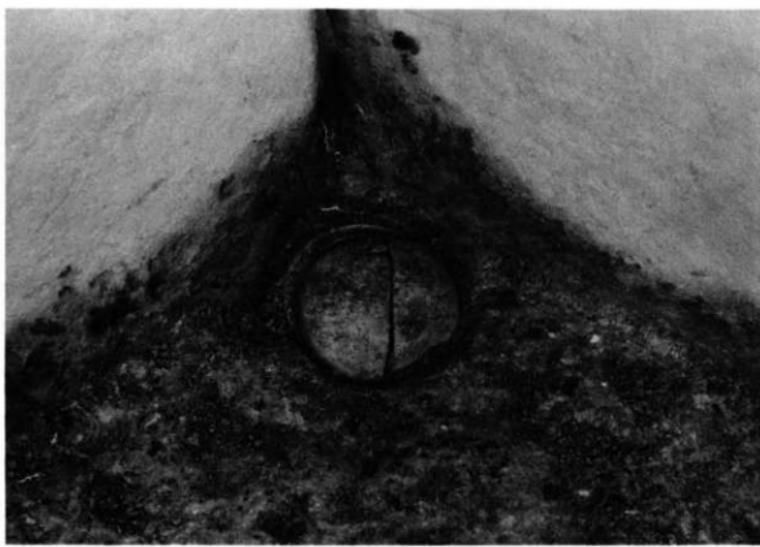
1 抽部の須恵器出土状況



2 奥壁に立てかけられた大刀



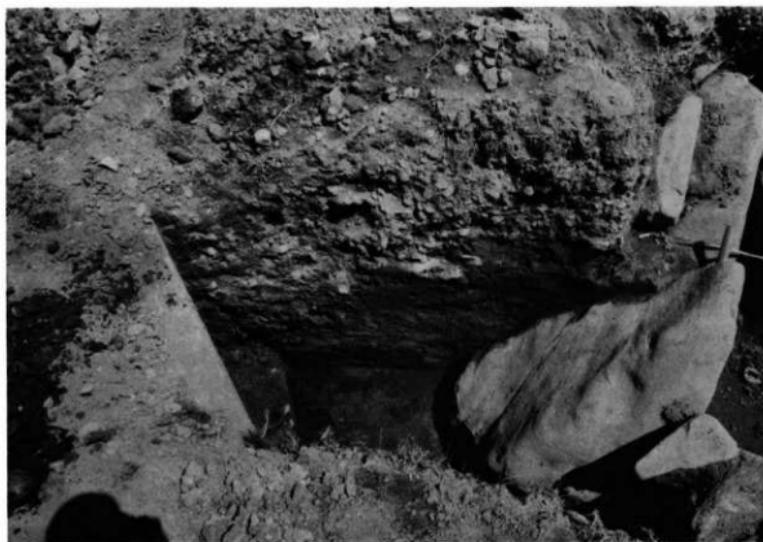
1 後室の石敷を取り除いた状態



2 後室北西隅部の須恵器据えつけ状態



1 側壁石の据えつけ状態



2 奥壁の後部



1 古墳東側周溝



2 同 土層をみる

図版一一 小八木古墳



1 古墳西側周溝



2 同 土層を見る



1. 鉄製大刀 9. 鉄製鎌 2~8, 10~12. 須恵器



1 第1トレンチ全景（南から）



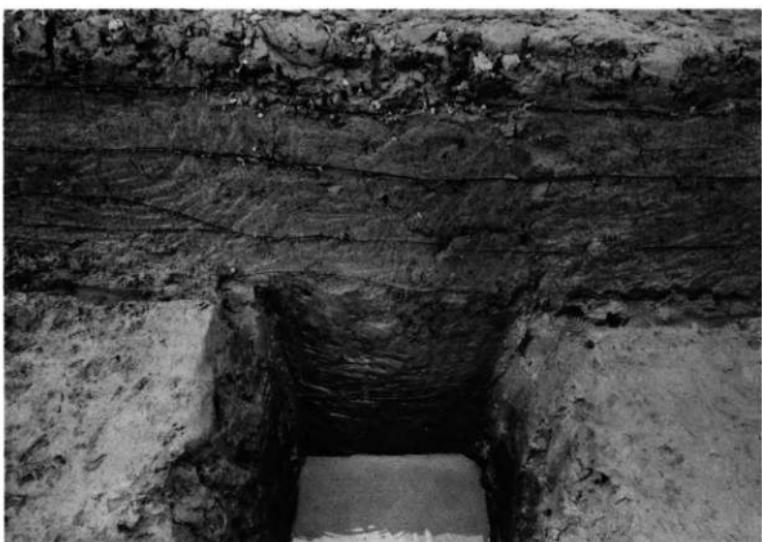
2 第1トレンチ基本層序



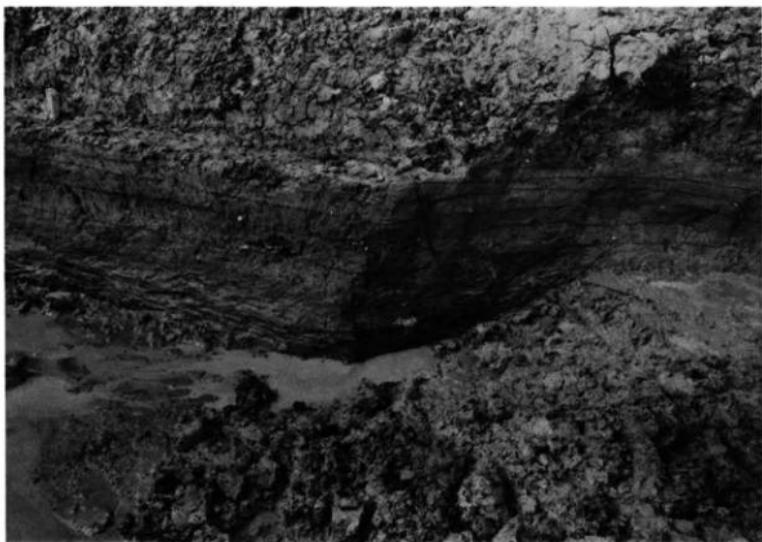
1 第2トレンチ全景（北から）



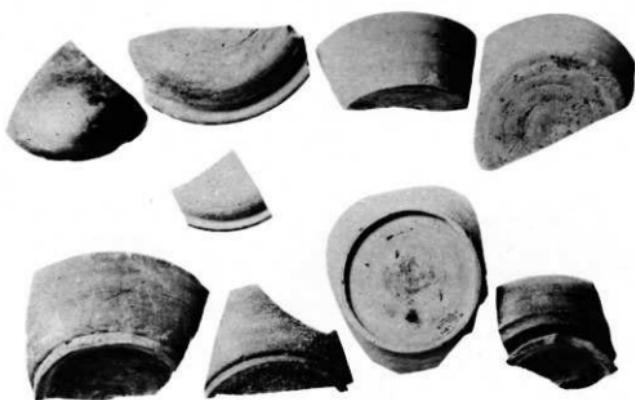
2 第2トレンチ基本層序



1 第2トレンチ深掘り土層



2 第3トレンチ旧河道肩土層



1 須惠器壺蓋・壺片等



2 須恵器壺・土師器壺片等



1 土師器・常滑窯、羽釜片等



2 須恵器長頸壺・平瓶片等

昭和56年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告VIII-6

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺イル

TEL 075-351-6034